

修士論文 (要旨)

2015 年 1 月

代名詞 **it** と **that** の相違点を巡って
— 既定性と印象性の観点から —

指導 山岡 洋 教授

言語教育研究科

英語教育専攻

213J3052

宋戸貴洋

Master's Thesis (Abstract)

January 2015

The Differences Between the Two Pronouns "It" and "That"
From the Perspective of Anaphoricity and "Impressivity"

Takahiro Shishido

213J3052

Master's Program in English Language Education

Graduate School of Language Education

J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hiroshi Yamaoka

目次

序論	1
第1章 it と that の用法	3
§1.1 辞書や文法書などによる it と that の一般的な用法	3
§1.2 伝統文法における it と that の扱い方	6
§1.2.1 人称代名詞と指示代名詞の違い	6
§1.2.2 Jespersen (1924), (1949; 1983) による it と that	7
§1.2.3 Quirk et al. (1985) による it と that	8
§1.2.4 Declerck (1991) による it と that	9
§1.2.5 Huddleston and Pullum (2002) による it と that	11
第2章 先行研究とその問題点	13
§2.1 Kamio and Thomas (1998) の主張	13
§2.1.1 「既獲得知識」 (Prior Knowledge)	13
§2.1.2 「拡散指示 (Wide Reference)」 と 「限定指示」 (Narrow Reference)	16
§2.2 先行研究の問題点	18
§2.2.1 伝統文法の問題点	18
§2.2.2 Kamio and Thomas (1998) の問題点	19
第3章 Kamio and Thomas (1998) に対する代案	21
§3.1 中右 (1983) による 「既定性」 (Anaphoricity)	21
§3.1.1 「既定性」 (Anaphoricity)	21
§3.1.2 「叙実性」 (Factivity) と 「既定性」 (Anaphoricity) の相違点	22
§3.1.3 「既定性」 (Anaphoricity) と it の関係	24
§3.2 「既定性」 (Anaphoricity) 再考	25
§3.2.1 「既定性」 (Anaphoricity) と that の関係	26
§3.2.2 「既定性」 (Anaphoricity) と特殊用法の it の関係	29
§3.3 「印象性」 (Impressivity) と it と that の関係	31
§3.3.1 「既定性」 (Anaphoricity) の問題点	31
§3.3.2 「印象性」 (Impressivity)	33
結論	40
注釈	I
参考文献	II
謝辞	IV
資料	i

要旨

代名詞としての *it* と *that* はその用法のかなりの部分で重なり合い、両方の交換が可能な場合も少なくない。しかし、完全に同じではなく、両代名詞の交換が許されない場合もある。そんなあいまい性を解消すべく代名詞の *it* と *that* に関する研究は、これまでも 1 つの大きな議論的的として論じられてきている。状況に応じて *it* のみが許される場合もあれば、*that* のみが許される場合もあり、また、どちらを用いても大きな意味の違いに通じない場合もある。その具体例として挙げられるのが以下の例である。

- (1) [A rushes into the room excitedly] ([A が興奮して部屋に飛び込んできた])
A: Guess what! I just won the lottery!
(聞いてくれよ! 宝くじに当選したよ!)
B1: **It's* amazing! (すごいね!)
B2: *That's* amazing! (それはすごいね!) (Kamio and Thomas (1998: 291))
- (2) A: Guess What! I just won the lottery! (聞いてくれよ! 宝くじに当選したよ!)
B: (Yes,) *it's* amazing! I heard about it on the radio, and I've invited everyone on the block to our house for a party!
(そうか, すごいね! 実は, ラジオでそのことを聞いて, パーティーをしようとかにみんなを誘ったところだよ!) (Kamio and Thomas (1998: 291))
- (3) A: Overnight parking on the street is prohibited in Brookline.
(ブルックラインでは深夜に路上駐車するのは違反だよ)
B1: *That's* absurd! (それは馬鹿げている!)
B2: *It's* absurd! (馬鹿げているよね!) (Kamio and Thomas (1998: 291))
- (4) a. *It's* odd that he hasn't phoned. (彼が電話をしなかったのはおかしい)
b. *It* is easy to criticize. (批判することは簡単だ)
c. He thought (that) *it* (would be) better to say nothing.
(何も言わない方が良かった)
- (5) *It's* today that he's going. (not tomorrow) (彼が行くのは今日だ (明日ではなく))
(以上, Thomason and Martinet (1986: 78))
- (6) *It's* hot in here. (ここは暑い) (Bolinger (1977: 79))

まず Kamio and Thomas (1998: 291) によれば, (1) は *that* のみが許され, (2) は *it* のみが許され, (3) では *it* と *that* が両方許されると述べている。そして (1) から (3) の用法とは別だが, (4) と (5) では Thomason and Martinet (1986: 78) は形式主語, 形式目的語, 強調構文の文頭には *it* を用いると述べているがその理由は述べられていない。(6) は, 白谷 (1997: 168) は Bolinger (1977: 79) の例文を用いて, *it* のみ許され *that* は許されないと述べている。ここで (1) ではなぜ *it* を用いると不自然になり, (2) ではなぜ *that* を用いると不自然になるのか。(3) では *it* と *that* の両方を用いたときにどのような違いが生まれてくるのか。(4) と (5) のような構文ではなぜ *it* が用いられるのか。(6) ではなぜ時・天候・距離・状況などを表す時に *it* が用いられるのか。このような事実から, 本論文は, 「既定性」

(anaphoricity)」と「印象性」(impressivity)」の2つの概念に基づいて it と that の違いについて言及し、(1) から (6) に見られる疑問に対する答えを明らかにしていく。

第1章では辞書や文法書などによる it と that の一般的な用法に着目し、日常レベルで it と that がどのように定義されているのかを述べていく。次に Jespersen (1924), (1949; 1983), Quirk et al. (1985), Declerck (1991), Huddleston and Pullum (2002) の4つの代表的な伝統文法の文法書を取り上げ、it と that をどのように扱っているのかを見ていく。

第2章では it と that の相違点について論述している Kamio and Thomas (1998) の理論を取り上げる。彼らの理論は両代名詞の意味論機能上の相違を語用論的に説明している。次に伝統文法から見えた問題点について述べていくが、この点から今後の教育にどのようにつなげていくのかを概観していく。そして最後に Kamio and Thomas (1998) の理論の問題点を指摘していく。反例をいくつか取り上げ、問題点を明らかにしていく。

第3章では Kamio and Thomas (1998) の代案を提示していく。Kamio and Thomas (1998) の理論では説明できない例を解決するために中右 (1983) が主張する「既定性」の概念を採用していく。その後、「既定性」の概念が it と that の照応的な働きの違いを明確にし、形式主語、形式目的語、強調構文で it が用いられる理由、環境を指すときに it が用いられる理由を明確にするために極めて重要であることを明らかにしていく。最後に「既定性」でも説明が困難とされる例を取り上げ、「印象性」という新しい観点から it と that の相違点を明らかにしていく。

本研究の結果、Kamio and Thomas (1998) の理論では説明が困難な例を「既定性」と「印象性」を用いて説明することができたことから、この2つ概念が it と that の相違点を明確にする重要な要素になると結論付けた。「既定性」の観点から、it は既定的な要素を指し、that は非既定的な要素を指し示すことがわかった。そして「印象性」は it と that の指示の強さが話し手の指示対象に対する印象の強さにつながるということがわかった。That は指示対象を指し示す力が強いことから話し手が指示対象に強い印象を持っていると言え、it は指示対象を示す強さが弱いことから話し手の指示対象に対する印象の弱さを表すと結論付けた。

REFERENCES

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.
- Ariel, M. (1988) "Referring and Accessibility," *Journal of Linguistics* 24, 67-87.
- Ariel, M. (1990) *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. Routledge, London.
- 東裕美 (2001) 「代名詞 it の that への置き換え可能性についての一考察」 『えちゅーど』 (お茶の水女子大学大学院英文学会) 31, 74-106.
- Bolinger, D. (1972) *That's That*. The Hague, Mouton.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. Longman, London.
- Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman (1999) *The Grammar Book*. 2nd ed., Boston, Heinle & Heinle, United States of America.
- Gundel, J. K., N. Hedberg and R. Zacharski (1993) "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse," *Language* 69, 274-307.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitaku-sha, Tokyo.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 (改訂三版), 金子書房, 東京.
- Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold, London.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, CUP, Cambridge.
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*, George Allen and Unwin, London.
- Jespersen, O. (1949; 1983a) *Modern English Grammar on Historical Principles II*, George Allen & Unwin, London; Meicho-Fukyu-Kai, Tokyo.
- Jespersen, O. (1949; 1983b) *Modern English Grammar on Historical Principles VII*, George Allen & Unwin, London; Meicho-Fukyu-Kai, Tokyo.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 大修館, 東京.
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 『談話と情報構造』 研究社, 東京.
- Kamio, A. and M. Thomas (1998) "Some Referential Properties of English *It* and *That*," *Function and Structure*, Ed. by A. Kamio and K. Takami, 289-313, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- 上山恭男 (2001) 「代名詞 it の指示特性: 「それ」との比較による it の理解」 『函館英文学』 (北海道教育大学) 40, 51-70.
- 神崎高明 (1994) 『日本語代名詞の研究』 研究社, 東京.
- Lakoff, R. (1974) "Remarks on this and that," *CLS* 10, 345-356.
- Leech, G.N. and J. Svartvik (2002) *A Communicative Grammar of English*, 3rd ed., Longman, London.
- 中村聡 (1996) 「前方照応代名詞 it と that の選択についての一考察」 『成城英文学』 (成城大学) 20, 65-82.
- 中右実 (1981) 「変形と意味の原理」 『英語青年』 第 127 巻 7 号, 426-430.
- 中右実 (1983) 「文の構造と機能」 安井稔他 (編) 『意味論』 548-626, 大修館, 東京.
- 西光義弘 (1997) 『日英語対照による英語学概論』 くろしお, 東京.

- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 斉藤秀三 (1956) 『代名詞用法詳解』 吾妻書房, 東京.
- 白谷敦彦 (1996) 「that と it の違い」『活水論文集 英米文学・英語学編』 (活水女子大学) 39, 165-185.
- Strauss, S. (1993) “Why ‘This’ and ‘That’ are not complete without ‘It.’” *CLS* 29, 403-417.
- 鈴木希明 (2009) 『総合英語 *be*』 New Edition, いいずな書店, 東京.
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage*, 3rd ed., OUP, Oxford.
- 高橋英光 (2002) 「it と that について」『北海道大学文学研究科紀要』 (北海道大学文学研究科) 108, 101-121.
- Thomason, A. J. and A. V. Martinet. (1986) *A Practical English Grammar*, 4th ed., OUP, Oxford.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘・マークピーターセン (2000) 『ロイヤル英文法』 改訂新版, 旺文社, 東京.
- 山中桂一 (2002) 「Traditional Grammar (伝統文法)」寺澤芳雄 (編) 『英語学要語辞典』, 678-679.
- 山岡洋 (2000) 「「前提」に関する一考察」『LEORNIAN』(日本英語教育英学会研究部会) 第5巻, 1-21.
- 山岡洋 (2014) 『新英文法概説』 開拓社, 東京.
- 安井稔 (1996) 『英文法総覧』 (改訂版), 開拓社, 東京.

DICTIONARIES

- Collins COBUILD Advanced Learners Dictionary of English* (2012) 7th ed., Collins, Boston. [COBUILD⁷]
- Longman Dictionary of Contemporary English* (2009) 5th ed., Longman, London. [LDOCE⁵]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2010) 8th ed., OUP, Oxford. [OALD⁸]
- 寺澤秀雄 (2002) 『英語学要語辞典』 研究社, 東京.